

# 山行報告書

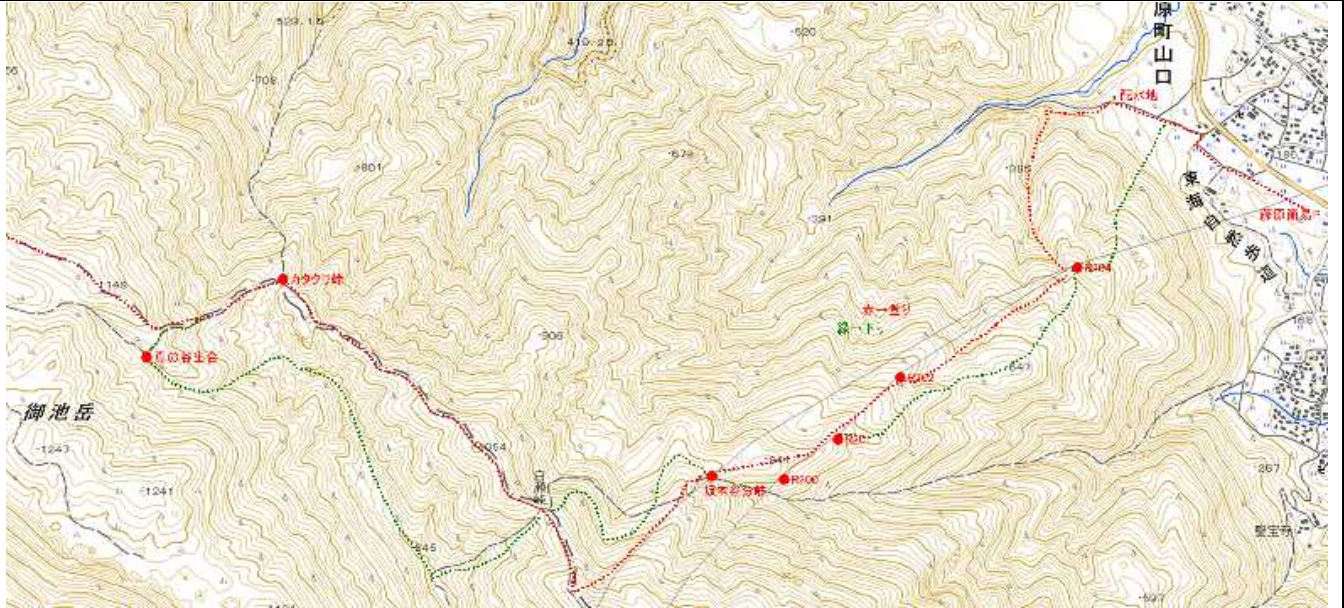
作成:2010年4月4日

愛知岳連 岡崎山岳会

山名[山域]	御池岳 [鈴鹿]	目的[方法]	花観賞と冬期ルート確認
期間	2010年3月27日(土)	形態	日帰りバス
参加人数	1人		

行動記録:3/27(土) 晴れ時々曇り

自宅(520)===豊田南 IC==桑名 IC==コビニ===藤原簡易P(635,645)--0:10--山口配水池(655)--2:20--坂本谷分岐(915,920)--1:10--県境稜線(1030)--0:10--白瀬峠(1040)--0:45--カタクリ峠(1125,11:30)--0:15--七合目(1145,1155)--0:35--鈴北手前 1105m(1230)--0:30--真の谷出合(1300,1330)--1:00--分岐(1430)--0:35--白瀬峠(1505,1515)--0:20--坂本谷分岐(1535)--0:30--子向井山 647m(1605)--0:45--藤原簡易P(1700,1740)===食事・温泉(1750,1920)===買い物===桑名 IC(2015)===豊田南 IC===自宅(2100)



日誌:

鈴鹿山脈は薄化粧の出迎いで、そのせいか土曜日にしては閑散とした藤原簡易Pである。寒さに震えながらスパッツを着け、配水池まで歩くと先客車2台にスパカブはない。谷コースをジグザグと進めば朱色の丸じりしが増えているような？ 1時間歩く頃から雪道となり後方の足音に振り向けば退会されたRさんである。御池方面らしく先を急がれる。坂本谷分岐からトラバース道を右に分け、県境稜線にある頭陀ヶ原と白瀬峠の間を目指した。45度の新雪を直登、山腹側斜面を灌木の道なき道を探したり、ガチガチの凍りに先を拒まれたりアルパイトの多い1時間であった。稜線から目線下に奥の平が映り驚く。冷たい風が吹いていたが現在地のほうが気になってすぐ地形図をみると、方位はドンピシャで嬉しーと叫ぶ。2~30cmのフカフカ雪に大きい足跡が白瀬峠へと向っている。藤原からだとするかなりの健脚だ。平行するテーブルラウンドは白く輝いて美しい。快適な稜線はカタクリ峠でコグルミ谷ルートと合流していて谷からのトレースはない。2月に樹氷の奥の平を周回しているので予定を変更し、樹氷の御池山魂を遠巻きに楽しむことにした。先客のトレースに重ね「法楽の小径」から眠りについたままの「幻の池」に寄り、吹く風にかかとと渴いた音が響く樹氷の回廊を歩き続けた。緩やかに延びる稜線先の鈴北岳では福寿草も見られるそうだが途中から引き返し予定の13時に真ノ谷分岐に戻る。冷たいおでん(ハットの不具合)を急いで食せば、御池への登りと下りの計4人が通る。再びトレースのない真ノ谷を30分遅れて出発。急降下のV字谷は涸れ、ゴロゴロとした石に草状のコケと雪がつき、高巻いたり、谷芯を右左と慎重に下る。標高差150m、3本杉まで40分も要した。枝沢を進みコグルミ峠か？真ノ谷か？地形図から下山時刻を先読んで計画どおりに進む。次第に谷の傾斜も緩くなると右手方向から奥の平の中心部に出る道なき斜面から足跡もある。さらに下れば広まった沢に雪解け水も流れ、テン場には閑寂とした敵地であった。少し歩いて記憶ある杉林から白瀬峠へ直登すると峠のプレートはリニューアル中。祠？春の御方に心待ちにしているとお伝えし、厳冬期をイメージしながら雪解けのトラバース道から坂本谷分岐へと下る。巡視路に樹木が密生してくると、走り去る老婦は妖婦か分からないほど暗い。子向井山は馬酔木の群生地で小さなプレートの標高が読み取れない。ピントがズレた眼鏡(サングラスに気づいていない)を外してみると「ありゃ！」である。馬酔木に酔いながら下り、朝歩いた畑の空を見上げてみた。17時下山報告を終え、珈琲の香り漂うお店で杣人氏の書巻から「春まだ浅き奥の平」を味読した。

感想:思いがけず前夜の雪となり冬期ルートの参考となった。出来ればアヤツ様が出没しないうちに、御池の閑寂とした真ノ谷で「グイバーク」しながら、焚き火を囲み杣人氏が問いかける「道」「道楽・・・鴨？」について語り合っていたらと思う。